

2016 年度第 5 回日本語教育研修会報告

石黒圭（国立国語研究所日本語教育研究領域教授）

日時：2017 年 3 月 25 日（土）台北、26 日（日）高雄

テーマ：文章理解において学習者は文脈情報をどう生かすか

—中国語母語話者を対象にしたケーススタディー—

【概要】

台湾の日本語教育機関で読解教育を行う場合、当地の日本語学習者が日本語で書かれた文章をどのように理解するのかを知り、その理解の特徴に合わせた授業活動を設計する必要があります。そこで、講演は前半と後半の 2 部構成とし、前半は、台湾人日本語学習者の脳内で行われる読解活動のプロセスに注目し、その段階的活動を鍛える授業実践例を紹介しました。後半は、語彙力を高める方法として、とくに中国語を母語とする学習者が語の意味を推測する方法に注目し、文脈との関連でその方法の広がり可能性を検討しました。

【前半：授業実践例】

講演の前半では、文章理解のさいに学習者の脳内で行われる活動を次の 7 段階に分け、そのうち、①画像取得活動と⑦状況想像活動を除く五つの活動に関連する授業実践例を紹介しました。

- ①画像取得活動：文字列を眺める
- ②文字認識活動：1 文字ずつ確認する
- ③語句分節活動：文字列を語に切る
- ④意味変換活動：語の意味を理解する
- ⑤統語解析活動：文の組み立てを考える
- ⑥文脈構成活動：前後の文脈を意識する
- ⑦状況想像活動：イメージを想像する

平仮名・片仮名・漢字の認識を考える②文字認識活動では、台湾人学習者の弱点となりがちな片仮名語（とくに非外来語）の理解、音読に表れる漢字語の理解を促進する活動を紹介しました。

文字列を語・句に分ける③語句分節活動では、「漢字／片仮名＋平仮名」のパターンから外れる文節の理解を確実にする練習法を紹介しました。

語形から意味を想起する④意味変換活動では、何の話題かを見抜く活動と、ワープロソフトの誤変換を修正する活動をとおして、文脈との整合性のなかでトップダウン的に語義を呼び出す感覚をみがきました。

文の文法的な構造を把握する⑤統語解析活動では、節をくくる [] を使って、長く複雑な文の構造を解析するトレーニングを行いました。

前後の文脈のつながりを意識する⑥文脈構成活動では、指示語の指示対象の特定、省略要素の復元、キーワードの連鎖などを手がかりに話題の連続を意識するトレーニングを行いました。また、関係面・内容面から後続文脈を予測する活動を行い、文脈にたいする感度を高める教育実践を試みました。

【後半：語彙推測】

学習者が日本語の文章を理解できるかどうかの鍵は語彙力にあることは疑いありません。しかし、語彙力は、語彙をたくさん知っているという「量」ではなく、多義語や固有名詞を文脈に合わせて理解するといった「質」が語彙力にとって欠かせない能力であり、学習者がストラテジーを上手に使えば、語彙量が乏しくても、文脈情報から意味を推測できることを、学習者が語義推測のさいに用いている手がかりを分類しながら紹介しました。その手がかりとは次の通りです。

- (1) 語彙的手がかり：当該の語そのものから得られる手がかりを用いる。
 - ① 派生的手がかり
 - ② 音声の手がかり
 - ③ 表記的手がかり
 - ④ 語構成的手がかり
- (2) 構造的手がかり：当該の語が置かれている前後の環境を手がかり考える
 - ⑤ 連語的手がかり
 - ⑥ 統語的手がかり
 - ⑦ 共起的手がかり
 - ⑧ 関係的手がかり
- (3) 内容的手がかり：当該の語を含む文の意味を手がかりに考える
 - ⑨ 直感的手がかり
 - ⑩ 論理的手がかり
 - ⑪ 経験的手がかり

【総評】

講演者としては内容を盛りこみすぎであったという反省はありますが、多くの来場者の方が興味をもって聞いてくださり、多様な質問やコメントをくださったことは、ほんとうにありがたかったです。貴重なご意見は、今後の私自身の研究教育活動に生かしていきたいと考えています。